
IS ~ インフィニットストラトス ~ 空の女王 ~

ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〈インフィニットストラトス〉空の女王

【Nコード】

N2029BA

【作者名】

ZERO

【あらすじ】

突然転生することになった主人公

第二の人生で何かおこるのでしょうか？

処女作なので、投稿は遅いかもかもしれませんが、頑張っていこうと思います。

応援よろしくお願いします

プロローグ(前書き)

初投稿ですが、どうもZEROです。
これから頑張って書いていきますので、
よろしくお願いします。

プロローグ

～プロローグ～

ある日、突然僕、『蒼月零』は車にはねられた

『あゝ、これ死んだな』

そう考えると短い人生だったな。

でも僕の15年の人生は有意義だったはずだ。

そう思いながら僕は静かに目を閉じた。

目を開けると、白い空間が広がっていた。

あれっ？僕生きてる？

そんな馬鹿な……

『おっ！起きたか？』

『…誰？』

なんか目の前に知らないおっさんが居た。

『あゝ済まないな、俺は神様だ』

神様？何言ってるのこいつは？

馬鹿なのか？

『おい、今失礼なこと考えなかったか？』

『気のせいだよ。で、僕何で生きてるの？』

一番気になっている疑問を聞くと、

『あゝそれは俺がちょっとミスってお前を殺しちゃったから』

こいつ殺っちゃってもいいかな？

『待て！物騒なことを考えるな！』

『……………はあ、分かったよ。で、僕はどうすればいいの？天国か地獄に逝くの？』

『いや、お前にはISの世界に行ってもらったことになった』

はっ？何？あいえす？

『あのIS？』

『そうそうそのIS』

……………へえー、あんまり嬉しくないかも…

だってあんな男女差別激しい世界嫌だしな。

でもそれ以前に、

『僕、男だから使えないんじゃない？』

『そこはほら、神様特権？ってやつだ』

適当だなくこの神様は、

『安心しろ。専用機はやるからさ、

能力は『そらのおとしもの』知ってるな？』

『知ってるけど…』

『それに出てくる五機のエンジェロイド

(アルファ)、(ベータ)、(デルタ)、(イプシロン)

、(ゼータ)、の能力を持ったISだ。何か不満はないか？』

『…問題ないよ』

『そうか、良かった。技は全部そのまま使えるからな。後、待機状態は指輪になってるから絶対アクセサリーと間違えるなよ』

分かったと返事をする神が、

『そろそろ時間だ。詳しいことは紙に書いてくから読んどけ。じゃ

あ第二の人生楽しんでこい』

『まあ、努力するよ』

そして意識が飛んだ。

主人公、オリキャラ設定

蒼月零

本作の主人公、元々学生だったのでIS学園への入学はあまり抵抗は無かった

容姿は白髪で首筋にのみ長く伸ばしたような髪型に青色の瞳、（キヤライメージは黒執事のチャールズ・グレイだが瞳の色を変えた）細身だがちゃんと筋肉は有り、前の世界の学校でもそれなりに人気であったイケメンで性格も友達思いのいい奴だが言いたいことははっきりと言う。学力は中の上ぐらいで運動もだいたいのスポーツは出来る。
後、周りもびつくりするぐらいの大食漢。

恋愛はしたことが無く女心には中々気づかない鈍感物

暁月来華

零と同室になる女子生徒

クラスは2組なので、絡みはあまりない。

容姿は黒髪のロングストレートで三つ編みを頬に垂らしたような髪

型に紫の瞳の美少女

(キャライメージは妖狐僕SSの白鬼院凜々蝶に三つ編みを追加した)

体型はスリムだがでる所はちゃんとでている

コミュニケーション能力が高く同室の零とす
ぐに仲良くなる

男の卑下される社会をよく思っていない。

ISの操縦はかなり上手い

ウラヌス

零の専用機でそれのおとしものに登場するエンジェロイド
ゼロの5タイプを使える

アルファ サルタフシロン 7

戦闘中にタイプの変更ができ、様々な敵と
戦うことが出来る。

展開時は顔以外の部分をほぼ全て装甲で包んでいて背中には大きな
翼が付いておりタイプによって装甲や翼の形状が変化する。

待機状態は五色の色が綺麗に振り分けられた
指輪になっている

主人公、オリキャラ設定（後書き）

次話から本編スタートです

第一話（前書き）

これから本編スタートです

第一話

第一話

……なんだろ、この状況。

女子からの視線がいたい、
ていつかぶっちゃけうざい。

だって目の前の男子以外全て女子って
もう僕は何？ウーパールーパーか何かですかって話なんだよね。

ていつかなぜ僕がこんな場所に来てしまったのかと言うと、

転生後、僕は何処かの部屋のベッドに寝ていた。とりあえず、起き
上がると机の上に紙があった。そこには、

『起きたか？神様だが、今居る部屋がお前の
家だ。と言っても、これからはIS学園の寮に
入るだろうからあまりつかわないかもな。』

一応、家具は一通りおいといたから生活はできる。後、預金は二億
ぐらい入れといた(笑)

もうすぐIS学園からお前に連絡が入る。
お前はすでにIS使える男ってことで、世界中
で知れ渡っている。

後、お前のISである『ウラヌス』を開発した
企業の間人は俺の送った奴らだからお前のISが怪しまれることは
ない。

じゃあな、第二の人生頑張れよ。』

『もつすでに知られてるんだ………』
『はあっ……』

ため息しかでない。

ブルルルル！ブルルルル！
電話だ。IS学園からか？

『はい？』

『はい！どもこんにちは。IS学園の山田真耶と言います。蒼月零君ですか？』

『そうですけど……』

『あなたが蒼月君ですか。改めまして、あなたのクラスの副担任になります、山田真耶と言います。明日のことで、お伝えしたいことがあります。』

『はい、何でしょうか？』

『え〜とですねえ、明日から一週間の間、今までは家からの登校すると言う話になっていたのですが、急に部屋が決まりましたのでお伝えしなければならぬと思った次第です』

それは一大事だ。危ない危ない明日わざわざ家に帰らなきゃならぬ

くなるどころだったよ

『ありがとうございます。わざわざ家に帰らなきゃならなくなるどころでした。』

『いえいえ、いいんですよ。なにせ私は先生』ですから!!』

何で先生の部分強調したんだ？

まあ、いつか。

『ありがとうございます。それじゃあ、また明日』

『はい。また明日』

ということだ、全く嫌になる。

ガラガラ

山田先生が入って来た。

『はい！まずこれから自己紹介していきこうと思います。』

自己紹介が始まった。

第二話

第二話

そうこうしているうちに、

僕の前の唯一の男子君まで回って来た。

さあ、何ていうのかな？

『えー……えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします』

えっ！それだけ？まさかそんな訳ないよね

だって見てみなよ。周りの女子の視線を、

もつと聞きたーいって顔してるよ。

さあ、何て言うのかな？

『以上です』

ガタタツ

何人かの女子がずっこけたよ。

まあ、そりゃコケるよね。

あんだだけ期待してたらね。

パアアアン??

いきなり凄い音がした。

聞こえた方向を見ると、織斑一夏君
が頭を押さえていた。

そしてその横には

『げえつ、関羽!』

『何故三国志の英雄が!!?』

パンパン!!!

何故僕まで……

『誰が三国志の英雄か、馬鹿者共』

この人が織斑千冬か。
凄い存在感だな。

『ってか、千冬姉なんでこ』パン!!!

『織斑先生と呼べ』

『はい…織斑先生』

またいらないこと言って怒られてる。

そこで山田先生が

『あ、織斑先生。もう会議は終わられたんで
すか?』

『ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付け
てすまなかつたな』

『諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる

操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解する。出来ない者には出来るまで指導してやる
。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな』

『『『『『キヤ

！ 千冬様、

本物の千冬様よ！』』』』』

教室中に黄色い声援が響き渡る。

なんだこのクラス、発声練習でもしてるのかな？

『ずっとファンでした！』

『私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！』

いや、別にどこでもいいからね。わざわざ北九州って言う必要はないよ。

『あの千冬様にご指導いただけると嬉しいですね！』

『はぁ………まったく毎年、よくもこれ

だけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスだけに馬鹿者を集中させているのか？』

いや、どんな女子が来ても一緒に反応だと思えますよ織斑先生。

『で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は。そしてお前はまだ自己紹介すらやってないのか？……って聞いているのか、お前は』

『ち、千冬姉、俺は』

パン！懲りないな〜織斑君

『織斑先生と呼べ』

『……………はい、織斑先生』

やり取りが終わった時には一夏が千冬の身内だということを知らるるには十分だった。

『ていうか… 織斑くんって、あの千冬様の

弟……………？』

『それじゃあ、男子で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……………』

『ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ』

女子の騒ぎは軽々しくスルー

そして

『おい、蒼月次はお前だぞ』

この空気の中でやれって言うんですか織斑先生、無茶ぶりが過ぎますよ。

『えっと、蒼月零です。よろしくお願ひしますね』にこっ！…！

こういう時は、笑顔を振りまいて乗り切るしかないよね。

バタバタッ！

前にいた女子二人が倒れた。なんで？

『はあっ…面倒事を増やすな、馬鹿者が』

何故？僕何かした？

『何、あの笑顔やばくない？』

『あんな笑顔で見られたらそりゃ倒れるね』

あの空気から逃げ切る作戦がこんなことになるなんて…

その後、自己紹介タイムが終わった。

第二話（後書き）

次でセシリアと接触です

第三話

第三話

自己紹介タイム終了後、簡単なISの説明が
山田先生からされてショートホームルームが終わった。

そしたら織斑君が

『唯一の男同士これからよろしくな蒼月』

『こつちこそよろしく、それと僕のご事は

零でいいよ』

『そっか、なら俺のご事も一夏でいいよ。

よろしくな』

この会話の間、女子がいつも以上に騒いでいたのには、何も言わないことにしよう。

そして授業中、やっぱりあの電話帳みたいな

IS説明書を読んどいて良かった。

読まなかったら、絶対この授業にはついて行けなかった。

そんな事よりさっきから一夏がずっとそわそわしているんだけど、
どうしたんだろう？

トイレかな？

一夏の不具合に気づいたのか山田先生が一夏に話しかけた。

『織斑君、質問があったら聞いてくださいね。なにせ私は『先生』ですから。』

なんで山田先生は先生の部分をいつも強調するんだろう？

そうすると一夏が意を決したように

『先生』

『はい、織斑くん』

緊張がはしる

『ほとんど全部わかりません。』

やっちゃったよ、こいつ。核爆弾並みの衝撃が教室を襲う。

ほら山田先生固まっちゃってるよ。

そこに織斑先生が

『・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？』

『古い電話帳と間違えて捨てました』

パン！！

『必読と書いてあったらろうが馬鹿者』

『……すみません』

『あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな』

『い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……』

『何を言っている。蒼月は送るのが遅れた影響で昨日届いたらしいが、授業についていっているぞ。』

教室でええええーと驚きの声があがる。

『本当なのか？零』

『一夏驚きすぎ。後、本当だよ。』

『と言う事だ、しっかりやれよ。織斑』

一夏が肩を落としていたので、

『一夏、僕で良ければ教えるけど……』

『本当か！……！』

と言つ訳で授業後、一夏に勉強を教えていると、

『ちよつとよろしくて？』

『何？』

振り向くと金髪の淑女といえる女子がいた。

『まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではな

いかしら？』

あ、この時代ならではの人間の一人か…

『悪いな、俺君が誰だかよく知らないし』
一夏が言うと、

『わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？』

『あ、質問いいか？』

『ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ』

いちいち言葉が多いな。

『代表候補生って、なに？』
ガタタツ！

『何言ってるのー夏、そのままの意味だよ。いわゆるエリートだよエリート』

と、わかりやすい説明をすると

『そう！ エリートなのですわ！その貴方のほうがまだ少し知性を持っているようですよわね』

『どいつもどいつも』

『本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡：幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？』

ふとそこに疑問が浮かんだ。

『あの〜ちよつといいかな？』

『なんですの？』

『選ばれた人間って言うなら、僕達のほうが 珍しいよね？絶対。』

『何を言うんですの！！』

『だって考えてみてよ。この中で見たら、僕

と、オルコットさんを知らない人が見て、どっちもISを使えるって言ったらどっちが珍しいかなんて子供でも分かると思わない？』

『私のことを知らない人間なんて居ませんわ！』

『居たじゃん、此処に』

そう言っで一夏を指差す。

『……………』

『もういいかな？一夏に勉強教えなきゃいけないから
キーンコーンカーンコーン』

『ありやりや、鳴っちゃったか、じゃあ一夏授業後にね』

『ああ、よろしく頼む』

僕は席についた。

第三話（後書き）

中々バトルまでいかない…

第四話（前書き）

オリキャラの来華がいよいよ登場です

第四話

第四話

時間は過ぎていき、放課後僕と一夏は部屋の鍵を山田先生に貰いに
行っていた。

『はい、どうぞ。織斑君が1025号室で蒼月君が1026号室で
す。お隣さんですね。』

『なんで僕達、相部屋じゃ無いんですか？』

『あゝ、それは両方の部屋の人が移動したく無いと言っているから
です。それに空き部屋もないのでこういうことになりました』

『分かりました』

『あゝ』

一夏が聞きたいことがあるようだ。

『何ですか？』

『俺用意なんて、持って来てないんですけど』

『あゝ、それなら』

『私が手配しておいてやったぞ。』

と言っても着替えと携帯の充電器だけだがな。充分だろ？』

織斑先生がバッグを掲げている。

『ありがとうございます冬姉』

パァン！

『学校では？』

『ありがとうございます。織斑先生…』

また殴られていた。学習しなよ、一夏。

そして部屋の前まで行き、

『じゃあな、零。晩飯の時に会おうぜ。』

『うん、またね。一夏』

部屋の鍵を開けると、シャワーの音が聞こえた。だけど、すぐに止み、一人の女子が出て来た。

『ごめんね、先にシャワー使っちゃって私は暁っ…』

急に黙った、同時に目があった。

その瞬間にその女子が驚いた顔で

『な、何で男の子が…?』

『あゝ、この部屋に住むことになりました
蒼月零です。宜しく。』

『……あつなるほど、あのIS動かせる男の子かゝ
あゝごめん、自己紹介が途中だったね。

私は暁月来華、こちらこそ、宜しくゝ』

その瞬間に隣の部屋から普通に生活すれば
絶対に鳴らない効果音が鳴った。

『何だろ?今の音?ねえ蒼月君?』

振り向いた瞬間に巻いていたタオルがはだけそうになった。

『頼むから服を来てください。暁月さん』

そう言うと、彼女は頬をすこし赤く染めて、

『ごめんね、忘れてた。』

あっち向いててくれる？』

『分かった』

とりあえず、着替えてもらってから、部屋での取り決めや色々な話をしているとき、

『もう晩ご飯の時間だし食べにいこうか？来華。』

『そうだね、行こっか零』

さっきの話の中で苗字で呼ぶのは、堅苦しいと言う事で名前で呼ぶことになった。

食堂に行くと、何故か頭にたんこぶを作った一夏が居た

第四話（後書き）

もうそろそろバトルシーンを書けそうです

第五話（前書き）

今回はセシリア好きに失礼な文になってしまいました。申し訳有り
ません。

第五話

第五話

次の日の授業中、織斑先生が不意に何か思い出したようで、

『ああ、授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとね』

意味が分からないように一夏は首を傾げていたところを織斑先生が全員に聞こえるように言う

『クラス代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいる』

教室が少し騒がしくなった、すると一人の生徒が手をあげて

『はいっ、それなら私は織斑君を推薦しますっ！』

『あたしもそれが良いと思いまーす』

『じゃあ、私は蒼月君に』

『私も』

と言った、それに便乗し数人が一夏に票を入れる、さらに零にも票が入る。

『候補者は織斑一夏に蒼月零か……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ』

『お、俺っ！？』

『織斑、席に着け、邪魔だ。他にはいないか？ いないのなら二人から選ぶが』

『俺はやるって言っただけな』

『座れ、馬鹿者。先程自薦他薦は問わないと』

『言っただろうが』

『他にはいないのか？ いないならこの二人でISの戦闘によって決定したいと思うが』

その瞬間にセシリアが立ち上がり

『待つてください！ 納得がいきませんわ』

『そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？』

また言ってるよ。

『実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術を修練しに来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！』

『いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！』

イラつときたからのでちょっと苛めてみようかな？

『大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては』 『待ちなよ』

『?????』

『さつきから聞いてれば何？グダグダグダくだらないことばかり言ってるさ、』

『ようするにクラス代表になりたいんでしょ？』

『物好きだねえ、わざわざなりたがるだなんて』

『君ってMなの？それともただのバカ？』

『誰がMですよ!!』

『君だよ。だってもし男の僕と戦ってボコボコにされたらどう？君の場合、男に負けたってことで、心まで傷付くんだよ。それをMって呼ばずになんて呼ぶんだよ。』

『もう我慢なりません!!』

『決闘ですわ!!』

『ここまでいったのですから、もし貴方が負けた時は貴方を私の奴隷にしますわよ!』

『別にいいよ、僕は負けないから。』

そして織斑先生が手を叩いた。

『よし!それでは一週間後、オルコットVS蒼月のクラス代表決定戦を行う』

『ちよつと待て!俺は?』

『織斑、喜べお前は強制的に副代表だ』

『喜べねえ〜!!』

一夏の叫び声が学園中に響き渡った。

第五話（後書き）

特訓シーンは飛ばす方向でいこうとおもいます。
次はいよいよセシリアVS零戦です！

第六話（前書き）

今回はセシリアVS零戦です!!
初のバトルシーン、頑張ります。

第六話

第六話

とうとうこの日がやって来た。

今日まで一週間、ずっとアリーナを使って

特訓していた。おかげで僕はウラヌスの

扱いはかなり上手くなったはずだ。

『頑張れよ、零。絶対勝てよ!』

ちなみに、一夏には政府から専用機が用意されるらしいが、そのI
Sはまだ届いていないらしい。

『もちろん、絶対勝つよ。』

『蒼月君、蒼月君、時間ですよ!』

準備してください』

山田先生が慌ただしく呼んでいる。

『はい!分かりました、じゃあ、行ってくるね。』

そして僕は手を上げて、

『行くよ、ウラヌス!、タイプ<ruby><rb>
<rp>(</rp><rt>アルファ
| </rt><rp>)</rp></ruby>発動^{オン}』

そして、指輪が輝き、純白の翼を付けた華麗なISを纏った零の眼の色が紅く変わっていた。

『よし！行くよ、ウラヌス！』

そのまま零は飛んだ

そして目の前に青色のISを纏ったオルコットがいた。

『あれがブルーティアーズか…』

手には2mを超すレーザーライフル

『スターライトmkIIII』

そして腰回りには四機のビットが付いていた

もう試合は開始しているのに、全く撃ってこない。

『撃たないの？早く撃ちなよ。それとももう降参する？怖気づいたの？』

『少しでも貴方に謝る気持ちがあるかもと思った私がバカでしたわ。それでは、その減らず口が二度と開けないように徹底的に叩いて差上げますわ！』

――警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。――

『喰らいなさい!』』

キュインツ!と独特な音と共に閃光が零の元へ駆ける。だが、それを零は軽々しく避ける。

『遅い、遅い、ほら頑張つて。』

当てられなきゃいいまないよ?』

『つ~~~~~~~~!?!た、叩きのめしますわ』

『君の武装で僕を叩きのめすは不可能だよ』

『くつ?踊りなさい!!わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で!』

そこからセシリアは撃ち続けるが零には一つも当たらずセシリアは苛立っていた。

『やる気がありますの?避けずに戦いなさい?』

『そつちこそ、当てる気あるの?』

そついうことは、当ててからいいなよ』

『調子に乗り過ぎですわ。』

キュオン!!

不意に後ろから撃たれた、何だ?まさかビットか!

『前ばかり見ているからですわ!』

一発当たっちゃったしそろそろこっぴげきしようかな？つん、そうし
よう。

『そろそろ攻撃するけどいいよね？』

『構いませんわ。まあ、当たるか分かりませんわよ？』

『じゃあ、遠慮なく。』

『永久追尾空対空弾 Artemis』発射！！

バシユバシユバシユ！！！！

セシリアは避けたが、後ろから回った弾を受けた。

『なんですよ！これは？』

僕は無視して撃ち続ける。

バシユバシユバシユバシユ！！

その全てがセシリアに着弾する。

『何故避けても当たるんですの？』

『これが追尾弾だからだよ。さて、そろそろ
終わらせようか』

『調子に乗るんじゃないやありませんわ？』

、
と言ってミサイルを撃って来るが

絶対防衛圏

『 a e g i s 』

『 起動。 』

バリアに着弾して無残に爆発する。
そして僕は、

『 超々高熱体圧縮対艦砲
H e p h a i s t o s 』

巨大な大砲のような武器が零の手に現れる

『 起動。 』

『 な、なんですか？それ… 』

何か言おうとしていたが、それは爆炎のレーザーに掻き消された。

その瞬間、試合終了を告げるブザーが鳴り響いた。

『 試合終了。 勝者、蒼月零 』

その時、ISのなくなったセシリアが落ちそうになっていたの
で拾
うと、

『 気絶してる。 はあっ、黙ってれば可愛いのにさ。 』

その言葉をセシリアが聞いていた事を零は知る由も無い。
その後、セシリアを保健室に運び、
起きるのを待っていると、

『……ん？んんっ』
『起きた？』

優しい声で言うと、

『私は何を？』

『僕と戦った後、すぐ気絶したんだよ。』

『……………はっ！』

セシリアは気絶間際に零に言われた可愛いと言っセリフを思い出して頬を赤く染める。

『どうしたの？』

『な、なんでもありませんわ。』

それより何故貴方が此処にいるんですの？』

『あー、それは今までの暴言を謝ろうとおもってね。起きるのを待ってたんだよ。』

『そういう事ですよ。それでは、私も』

『ごめんなさい！』

『これで仲直りだね』

『そうですね』

そこからは口喧嘩無しに沢山の話をした。

その間、時々オルコツじゃ無かったセシリアが頬を赤くしていた。何でだろ？風邪でも引いたのかな？

それと、何故名前と呼んでいるのかと言うとセシリアが

『仲直りの印として、これからは名前で呼び合いましょう零さん！』

『！』

という訳で名前で呼ぶ事になったのだった。

その日の夜、来華と喋っていると、

『そういえば零、代表候補生に勝ったんだって？それも圧勝で』

『まあね でもそれは来華が特訓に付き合ってくれたおかげだよ』

そう何を隠そうこの来華、ISの操縦がめちゃくちゃ上手い。

代表候補生かと思うくらい強かった。

『えっ！そうかな？』

『そうだよ。ありがとう来華』

『べっ別にこれくらいなら…』

何故か頬が赤くなっていた。

『そうだ！明日は休みだし二人でどっか出かけようか？お礼も兼ねて』

『ほっ本当？分かった、明日だね？いいよ、行くっ行っ！』

やたらテンションあがるな？

何か用事でもあるのかな？

『じゃあ、明日10時に此处出発ね！』

『了解』

明日の予定が決まった。

第六話（後書き）

バトルシーン書くの難しい。

次は零と来華のお出掛けです。

初のオリジナルストーリーリー頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2029ba/>

IS～インフィニットストラトス～空の女王～

2012年1月14日09時50分発行